



待降節第 4 主日 (ルカ 1:39-45)

エリサベトは声高らかに祝福した

待降節第 4 主日、ご降誕もいよいよ間近に迫りました。与えられた福音朗読はマリアがエリサベトを訪問する場面です。この中に出てくる「挨拶」について考え、ご降誕の直前の準備に充てたいと思います。

来年 2 月 20 日 (土) の夜と 21 日 (日) の昼に上演される信徒発見劇の舞台稽古がいよいよ始まりました。台本を 12 月初めにいただいて、「よーしセリフを覚えるぞ」と意気込んで台本を確かめました。セリフが 5 つ用意されていました。

「旦那様」「いえ、旦那様」「お許してください、旦那様」「はい、旦那様」「へい、旦那様」です。厳密には旦那様の後に続くセリフもあるのですが、ざっくり言えばこの 5 つのセリフということになります。今この 5 つのセリフを言う場面の、血のにじむような猛練習をしているところです。

まあ大げさな、と思うかもしれませんが、わたしの出番はほかにないわけですから、ここにすべてをかけてやっています。テレビドラマでは一言のセリフもない通行人もいます。前方からやってくる通行人と、後方からやってくる通行人とでは、顔が見えるか見えないかで別扱いだと聞いたことがあります。そこからすれば「旦那様」と 5 回言うだけでもたいしたものです。小教区の皆さんが、すべての予定を横に置いて劇を観に来るだけの価値があります。たぶん。

福音朗読に戻りましょう。わたしたちは聖書を日本語で読むので、どうしても日本語で出来事を理解しようとしています。けれども、聖書の出来事を日本語で理解しようとするとうまく内容を理解し損ねることもあるのです。もちろん聖書が書かれたもともとの言語であるギリシャ語で理解できれば出来事を正確に理解することができるでしょうが、一般の日本人にはとても無理です。

そこで、今回の朗読箇所に出てくる「挨拶」という言葉が、聖書のほかの箇所ではどのように使われているのか、そういうことも確認しながら出来事を理解しようとするなら、日本語の聖書であっても、より実際の出来事に近づく理解にたどり着けるとと思います。

聖書の挨拶ですぐに思いつくのは天使がマリアに神の計画を告げる場面 (ルカ 1 章 26 節から 29 節) です。「六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」

マリアは「いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」(ルカ 1・29) とあります。この例と、今週の朗読箇所を重ね合わせると、聖書の中での「挨拶」というのは、単なる儀礼ではなく、相手に対する「祝

福」が込められているようです。ですから今週の朗読箇所でも、「挨拶」という言葉を「祝福」という言葉に置き換えて考えてもよいかもしれません。つまり1章39節を「そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに『祝福』した。」そう読み替えてもいいかもしれません。

そうすると、マリアはエリサベトを祝福し、エリサベトはマリアを祝福し、たがいに祝福し合っている姿が浮かびます。「挨拶」と訳されてはいますが、日本の挨拶ではこのように祝福し合う様子を思い浮かべることはないのですから、聖書の世界の「挨拶」をわたしたち日本人の「挨拶」と受け取らないほうがよさそうです。

もう一つ、聖書の世界の「挨拶」に「聖霊の働き」を見ることができます。祝福は人が人を祝福するわけではなく、ある人が別の人に神の祝福を願うものです。ですから人が挨拶に祝福を込めているとき、そこには神の愛である聖霊が働いているわけです。聖霊の働きに満たされてマリアは神の計画を受け入れ、エリサベトは間近に迫っている救い主の到来をほめたたえました。

わたしはこう考えました。わたしたちが聖書の世界の「挨拶」を積極的に取り入れるなら、救い主の到来はより多くの人に知られ、より多くの人に救いをもたらすのではないのでしょうか。わたしたちが人に祝福があるようにと願う挨拶を交わすなら、挨拶を送る相手も聖霊の働きに触れて、御子イエスを送ってくださった神に心を開くようになるのではないのでしょうか。

それぞれ、何ができるかを考えてみましょう。子供たちの世代に、教会から遠くなってしまった人々が身近にいるかもしれません。その人たちのために、わたしたちは祝福を願う挨拶ができるのではないのでしょうか。結婚をしてはみたが、結婚相手を教会に近づけるどころか、カトリック信者のほうが教会から疎遠になっているかもしれません。そのような子供たちに、祝福を願う挨拶ができるのではないのでしょうか。

聖書の世界の「挨拶」を交わす人々の上に聖霊は必ず働き、神の意志を分からせてくださいます。わたしたちが人を立ち返らせることは難しいかもしれませんが、祝福を願う挨拶を交わすことは必ずできるはずです。わたしたちもエリサベトに倣い、声高らかに言いましょう。人間を救う神の御計画は、すぐそこまで来ているのです。

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)